



Rokko Catholic Church Bulletin

カトリック六甲教会 教会報

2013

8

No.500



もっと「今を大切に生きる」

主任司祭 松村信也

今月の教会報は、創刊以来 500 回を数える記念の教会報です。ひと口に 500 回といっても 42 年の月日を歩んできています。42 年前といえば 1970 年、高齢者にとってつい昨日のように錯覚します。しかし、1970 年といえば先ず想起するのが、70 年安保粉碎のために 1968 年から始まった学生運動、“1970 年のこんにちわ” で始まった大阪万国博覧会がありました。それに東京では、銀座、新宿の一般道が歩行者天国になったこと、故植村直巳さんがエベレスト初登頂、アポロ宇宙船 13 号の打ち上げ、わが国最初の人工衛星「おおすみ」の打ち上げ成功、そしてあの忌まわしい“よど号ハイジャック事件”がありました。また当時流行っていた歌は、黒猫のタンゴ、ドリフのズンドコ節、誰もいない海、希望、明日に架ける橋、そして Beatles の Let it be（あるがままに）が、代表曲だったでしょう。その他たくさんありますが、それほどこの時代は日本全体が良きにつけ悪きにつけ、躍動的な社会であったと思います。

さて教会も 42 年前にフラッシュバックすると、やはり大きな転換期でした。1965 年に第二バチカン公会議が終わり、社会に開かれた教会へと生まれ変わります。それまでのラテン語典礼から本国語（日本語）典礼へ、同時に日本独自の典礼聖歌の作曲に連日多忙を極めていました。そして、全国の教会に新しい典礼と典礼聖歌の普及に奔走した時代でした。また第二バチカン公会議は、これまでにない新しい教令を次々に発布しました。その中でも「信徒使徒職に関する教令」は、すべての信者を絶賛させる教令でした。1970 年 2 月には、土井枢機卿が帰天され、後任に東京大司教区補佐司教であった白柳司教が着座した年でした。ローマ・バチカンでは、第二バチカン公会議による新しい典礼や教理の変更に断固反発したマルセル・ルフェーブル神父が、1970 年に反動的な聖ピオ 10 世会を設立した為、教会から破門された年でもありました。このように内外ともに変化の多い「激動の時代」であったと記憶修正しなければならないでしょう。

500 号既刊記念を契機に過ぎ去った日々を振り返り、本当にすべてのものが移り変わっていたことに、改めて驚かされます。この世に存在するすべてのものは刻々と移り変わり、変わらないものは何一つありません。つまり、移り変わるのが真理だと見つめていけば、今を大切に生きていくという前向きに、積極的な生き方をすることができるといえるでしょう。勿論、誰もがその時、その時代それなりに大切に生きてきたと思います。しかし、今 42 年を振り返ったとき、さらにもっと一瞬、一瞬のその時を“丹精に、素直なありのままの自分で生きる”ことが、いかに大切であるかを意識させられます。

「明日のことまで思い悩むな、明日のことは明日自らが思い悩む。」（マタイ 6：34）今を大切に生きるのです。この歩みこそキリストの道であり、その途上で真理の出会いがあり、永遠のいのちへと繋がっていくキリスト者としての生き方になるでしょう。



シリーズ「何でも知っとこ」(5)

聖母の被昇天

主任司祭 松村信也

ご復活祭、クリスマスに次いでカトリック教会の中で第三番目に大きな祝日が、「聖母の被昇天」です。ところがカトリック教会の中で”教義”として公認されたのは、20世紀に入ってからのことでした。1950年当時の教皇ピオ12世によって、全世界に向けて聖マリアの被昇天の教義が荘厳に公布されたのです。

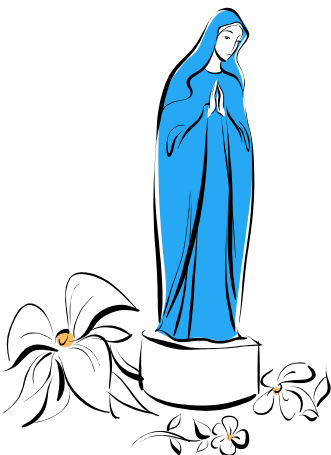
その“教義”とは、簡単に言えば「マリア様が靈魂も肉体もともに天に上げられた」ということです。このことをめぐって何世紀にもわたって多くの神学者たちは論争を繰り返してきたのです。確かに、聖書の中には聖母の被昇天についてどこにも明記されていません。それを暗示させるような聖書の箇所は、①創世記3章15節（女について）②ルカ1章28節「おめでとう恵まれたかた」③Iコリント15章（復活について）に見られます。

しかし、カトリック教会は何世紀にもわたって伝達されてきた伝承（聖伝）を大切にしています。したがって、この聖母の被昇天の教えも神から啓示された伝承の一部であることを公布することによって、マリア様が神の母であることを主張するのです。

「おめでとう、恵まれたかた」。大天使ガブリエルからマリア様は、この言葉によって挨拶を受け、生涯において神がともにおられ、恵みに満ちたものでありますということで、キリストと最も深く結ばれました。そして、“この言葉は”死んだ後もキリストの復活と栄光に預かっていることを含蓄した言葉であります。

「無原罪の神の母、終生処女であるマリアが、その地上の生活を終わった後、肉身と靈魂とともに天の栄光に上げられたことは、神によって啓示された真理であると宣言し、布告し、定義する」（『カトリック教会文書資料集』DS3903）。マリア様が復活の恵みを受け、キリストを通して神における人間の完成に到達したことを、確信をもって宣言しているピオ12世の言葉です。

8月15日が聖母マリアの祝日であることについて、歴史的には次のように言われています。5世紀のエルサレムでこの日に祝われていた神の母マリアの記念は、6世紀には、マリア様の死去の日として東方教会で祝われるようになりました。この死去は、マリア様が天に召された（帰天）ことと永遠のいのちのうちに誕生したこととして記念されていたようです。やがて7世紀半ばに西方教会にも受け継がれました。



マリア様が被昇天の名で知られるようになったのは、8世紀末になってからです。こうして1950年のピオ12世の教義宣言に至るまでマリア様への信心の深まりと同時に、次第にこの日を特別な日として祝うようになりました。

聖母の被昇天への信仰は、マリア様だけが特別な存在だと言い表すものではありません。キリストによる救いに預かる人たちの象徴として、信じるすべての人たちの救いへの希望を表現するものです。そこで聖母の被昇天ミサの集会祈願では、このことについて明確に教えています。「全能永遠の神よ、あなたは御一人子の母、汚れのないおとめマリアを、からだも魂も、ともに天の栄光に上げられました。信じる民がいつも天の国を求め、聖母とともに永遠の喜びに入ることができますように」と。 *Ave Maria Gratia Plena*

忘 れ な い で !

～東日本の被災地から～

「東日本被災地のボランティア活動報告」

第4回 知ること・伝えること

「写真は被災された方に配慮して撮ること」というのが、ベースの決まりにあります。当然のことですが、多くのボランティア達は萎縮して、帰り際に「そういえば何にも写真撮ってないや」と言って、仲間と一緒に記念撮影をするのが精一杯でした。

確かに、震災や津波の映像は繰り返し流され、インターネットを開けばいくらでもデータがあふれています。被害の状況なら、いつでも見ることができるので、「困る」ことはありません。

しかし、実際に被災した現地に入って活動していれば、報道されない何かを自分の目で見ることになります。大船渡ベースの場合、活動が雨で中止になったり、依頼が少なればスタッフが車で被災状況の視察にボランティア達を連れ出すこともあるし、陸前高田での活動もあります。米川ベースなら、いやでも毎日ボランティアセンターまでの途中、全てを流された志津川の街の中心部を抜けるのです。

そこで何も感じないはずはありません。誰かに何かを伝えたいと思うのが、むしろ自然なことでしょう。その時、自分の目で見たものを伝えるのに、自分でシャッターを切った写真は説得力を持ちます。その時の光景を、写真に写りきらなかった部分まで説明できるからです。

このことを一緒にいるボランティアに伝えたと、みんな手を合わせたり、目を一瞬閉じてから写真を撮ります。間違っても、ピースサインをしながら写真に収まろうなどとは考えてもいません。実は、陸前高田の奇跡の一本松でも、気仙沼の打ち上げられた漁船の前でも、にこやかにピースしながら写真を撮っている人を見かけました。そんな、配慮のない人達とは明らかに違う、真摯な視点で撮られた写真なら、自分の生活拠点に戻って話をする時に、語りかける力が違うだろうと思います。



現地の人と話をしても、「見たまんまが現実だからねえ、な一あんもなくなったけど、命が残ったから、伝えていかなきゃな」という言葉を聞きます。やがていつかは起こるであろう、次の自然災害に向けて、備えるべき・伝えておくべきことというのががあると教えられます。それをできるだけ多くの人々が共有し、一人でも多くの命を救いたいと、今回被災された方々は思っている、そのことをしっかり受け止めることが大切だと感じます。

今回、18年前の記憶を最も強く思い出させたことは、猛烈な砂埃でした。建物の瓦礫、更地になった地面、復旧工事に伴う視界が遮られ、息が苦しいほどの砂埃は、かつて神戸が経験した歴史の再現でした。

土砂や瓦礫を積んだダンプカーが行き交い、巻き上げる砂埃の中、陸前高田の何もかもが津波で流されたかつての中心部を歩いていると、18年前の記憶が鮮明に蘇ってきました。仮設の市役所や駅、アスファルトの道路だけが異様にはっきり見える光景、映像では伝わらない、そこでしかわからない環境というものがあります。



そんな中、黙々と瓦礫の分別作業をされている方々もおられます。幾つもの山積みになった瓦礫、それをバケツに入れ替えて地面に広げてひとつひとつ分別する、気の遠くなるような作業をずっとされている方々、声をかければ丁寧に答えて下さる、その方たちもまた、被災された方であることを知って、胸がつまる思いでした。

車で通り過ぎてしまえばわからない、そんな現実もあります。報

道では伝わらない、実際に見てきたこと・感じたことを伝えることが必要なのだと思います。与えられた時間をどう使うか、神様は決して強制されません。ただ、心の内側から突き上げてくる想いの中に働いておられるのだと感じます。「伝えなければ」という気持ちが被災された方々にもある以上、私たちもまた、その気持ちを広げてゆく義務があるのではないのでしょうか。

復興に向けた取り組みはあちこちで感じられます。プレハブの仮設商店街がどの町にもオープンしていました。いち早く復旧した大きなスーパーの横や、かつてそこは駐車場であったであろう場所に、明るいメッセージを掲げて営業していました。

地域の基幹産業である漁業・林業もそうですが、経済的な復興が第一である以上、そこに住む方々が希望を持って前向きに取り組まれることが大切です。そこから私たちも元気を分けていただくことができるし、何かお手伝いできないかと考えることもできるでしょう。厳しい状況が伝えられてはいますが、そこにおられる方々は必死なのです。

ここにいてできること、ほんの小さなことでも考えてみませんか。遠い三陸地域ですが、つながりはきっと身近にあるような気がします。

それぞれのベースの活動内容をブログでみることができます。関心のある方はどうぞ。

大船渡ベース <http://ameblo.jp/ofunatobase/>

米川（南三陸）ベース <http://c jyonekawa.wordpress.com/>

2013 年 第 2 回小教区評議会議事録

- (1) 日 時： 2013年07月14日（土）11：15～
(2) 場 所： 第4会議室
(3) 出席者： 松村主任司祭、片柳助任司祭、議長団、評議員

■ 報告事項 （今回、協議事項はありませんでした。）

- ① 神戸地区大会
- ② 年次報告会
- ③ 7月度神戸地区評議会
- ④ 納涼の夕べ
- ⑤ 教会学校キャンプ
- ⑥ 中高生キャンプ
- ⑦ 神戸市民クリスマス
- ⑧ その他

— 第3回小教区評議会は10月13日です。 以上

～．～

2013 年度第 3 回地区役員会報告

2013 年 7 月 21 日（日）11：15～12：30

松村主任司祭、飯塚評議会議長、地区役員

- 1 納涼の夕べ 《手をつなぎ 心つないで 夏祭り》（企画チーム）
- 2 「ふっこうのかけはし」（大橋さん）
- 3 「神戸市民クリスマス（12月20日）」（中川さん）
- 4 小教区評議会年次報告会（6月16日開催）について（川合）
- 5 大阪司教区よりのアンケート（川合）
- 6 共同祈願文の作成（川合）
- 7 松村主任司祭から

※ 次回地区役員会 9月8日（日）11：15～

（地区会 川合弘一）

納涼のタベ 《手をつなぎ 心つないで 夏祭り》

今年も夏のひと時、納涼のタベでご家族一緒にお過ごし下さい。
8月17日(土) 18:00~20:00 教会にて開催されます。

中高生会からは、ヨーヨー釣り、スーパーボール。
教会学校からは、ゲーム。みんなで一生懸命に考えました。
そして、屋台では地区の皆様が腕をふるってお待ちしています。

東灘北1	焼きそば
東灘北2・芦屋	綿菓子・かき氷
東灘南	おにぎり(梅・おかか・こんぶ)・コロッケ・枝豆・スイカ
灘西・中央	飲み物(ビール、ジュース、サイダー)
灘南・神戸西	焼き鳥、イカ焼き

どうぞ皆様お誘い合わせの上、ご参加をお待ち致しております。

地区会 行事企画チーム 納涼のタベ担当 入江

ベトナム視察旅行のご報告

片柳弘史(助任司祭)

6月17日から21日の5日間、釜ヶ崎「旅路の里」の視察旅行に参加して、ベトナムに行ってきました。この旅の中で感じたことをご報告したいと思います。

わたしが最も興味を持っていたのは、共産党による迫害の中で、カトリック教会、とりわけイエズス会がどのような活動をしているのかということでした。現地に着くまでは、「きっと政府の迫害におびえながら隠れるようにして活動しているのだろう」と想像していたのですが、その想像はいい意味でまったく外れていました。ホーチミン市の郊外にあるイエズス会の神学院は、日本の神学院よりもはるかに広々とした敷地を持ち、100人の神学生を収容できるという4階建ての巨大な建物がそびえていました。現在、76人の神学生と20人近いイエズス会員、外部からの教員が生活しているとのことでした。「一体、どこに迫害があるのだろう。」それが、この神学院を訪れたときの第一印象でした。



ベテランの会員に話を聞くと、90年代前半から迫害が弱まり、この10年は司祭養成に対する干渉もほとんどなくなったとのことでした。神学校入学には政府の許可がいるものの、今年20人の修練者が入会したという話から判断すると、それもほとんど形骸化したもののようです。ベトナム管区の会員は現在197名ですから、この勢いでゆけば10年で今の2倍の規模の管区になるでしょう。

現在の活動の中心は、信徒に対する黙想指導だとのことでした。驚くべきことですが、昨年1年間に、若者向けにアレンジした8日間の霊操を1000人以上の大学生に授けたそうです。この



数は、1975 年のサイゴン陥落前の実績の数十倍とのことでした。若者たちの人生の根幹に触れる黙想指導は、きっとこの国の将来を変えていくことでしょう。

現在はこのような状況ですが、サイゴン陥落からしばらくのあいだは厳しい迫害があったそうです。教会財産のほとんどが没収され、多くの司祭が逮捕、監禁されたと聞きました。現在の神学院の敷地も没収の対象になりかけたのですが、信徒たちが機転をきかせて「自転車組み立て協会」という組織を作り、その名義で土地を登記することで没収を免れたそうです。この話をわたしにしてくれた神父様ご本人は、1985 年に反政府活動の疑いで逮捕され、37 ヶ月間投獄されたとのことでした。思想犯を収容する薄暗くて小さな監獄での生活は、まさに地獄の日々だったそうです。実際、もっと長く収監された司祭の中には、発狂してしまった人もいたとのことでした。

迫害は、完全に終わったわけではありません。本人はもちろん、親族の中に 1 人でもカトリック教徒がいれば公務員になれない、反政府的な発言をすれば逮捕されるなどの迫害はいまも続いているそうです。そのような閉塞した状況の中で、人々は救いを求めて教会に集まり、教会はいつも活気に満ちあふれている。若者たちは、意味のある人生を求めて次々と司祭・修道者に志願する。それがベトナムの教会の現状のようでした。たくさんの司祭・修道者を海外に派遣することで、ベトナムの教会はこれから世界にその活力を分かち合ってくれることでしょう。ますます身近になっていくベトナムの教会のことを、より深く学んでゆきたいと思います。



韓国の教会訪問の旅から

主任司祭 松村信也

7 月 1 日から 4 日迄、イエズス会日本管区使徒職検討委員会のメンバーと共に初めて韓国の教会を訪問しました。当初の目的は、3 日に行われた韓国イエズス会士 4 名の司祭叙階式への参加と韓国イエズス会の使徒職現場の視察でした。出発一週間前、ソウル大司教区事務局長の朴神父から特別の招待を受け、ソウル大司教区の事務局と平和放送局（韓国カトリック放送局）、ソウル大司教区司教座聖堂（明洞大聖堂）の見学と案内をして戴きました。また西江大学、イエズス会神学院、イエズス会管区長館、そしてイエズス会使徒職の諸施設を訪問、最後に、韓国殉教者の地（切頭山殉教地）を見学することができました。朝早くから夜遅くまで猛暑と豪雨の中での移動は厳しいこともありましたが、それ以上に得るものが多く有意義な訪問となりました。

すでに口頭で報告しましたが、韓国の教会は司教区数 16、小教区 1664。そして韓国の人口の一割（536 万人）がカトリック信者であり、その数は毎年増加しているとのことでした。勿論、信者の数と比例して司祭、修道者の数も日本の比ではありません（司祭；4754 人、修道者；ab. 14,000 人）。したがって、事務局には、園児対象使徒職から高齢者対象使徒職のセクションまですべての人々に対する福音宣教窓口が設けられ、各々数名のスタッフが担当していました。また明洞大聖堂の真向かいにある 10 階建ての大きなビルの平和放送局には、新聞、ラジオ、そしてテ



レビのマスメディアによる宣教活動部門が 150 名からなるスタッフと 4 名の司祭によって運営されています。

このマスメディアによる活動について、「一番経済的負担が大きいのですが、目で確認できない福音宣教であっても、それ以上に電波と文字を通してすべての地域へ見える形、聞こえる形の福音宣教をすることで大勢の人々にキリストの救いである“み言葉”を伝えていることに価値があるのです」と、局長は熱く語ってくれました。しかし、現実はとても厳しいとのことでした。因みにテレビは 24 時間中 21 時間の放映で、カテキズムの番組、司祭と司会者が視聴者から相談を受ける「Q&A」番組、子供向けの番組（信仰への導き）、殉教者



ドラマ、世界の巡礼地番組、ミサの生放送、お祈り、黙想番組など。中でも一番の長時間人気番組は「Q&A」番組とのことでした。

韓国の教会を見て驚かされたのは、とても生き生きして活気に溢れていることです。勿論、信徒数が多い、若い世代の方も多いということもありますが、それだけではないように感じました。

その理由のひとつは、韓国のキリスト教の歴史が起因しています。

日本のキリスト教史より新しいですが大きな違いは、宣教師によってキリスト教が韓国に渡来したのではなく、一人の韓国人の信者によってキリスト教が韓国の地にもたらされた（1784 年）ことです。以降、キリスト教は韓国の全地に広がっていききました。当然のこととして、既存宗教との対立が激しくなり迫害、殉教の歴史を歩むことになりました。

また特に、注目したいのは第二次大戦後の独立時（1948 年頃）において韓国では、カトリック教会よりもプロテスタント教会の方が飛躍的に発展していったことです。プロテスタント教会は、教育活動中心に韓国全土に展開しました。その頃、カトリック教会は教育よりも病院、福祉施設を中心に活動していました。1970 年代前後から民主化、人権運動が激化してきたとき、カトリック教会はその運動をサポートし、国民から大きな支持を得るようになりました。それ以降、現在もカトリック教会に対する国民の評判は良く、キリスト教信者になるならカトリックにと囁かれているとのことでした。その他、韓国の歴史の詳細については、見識の高い方々が沢山おられますので省略させていただきます。初めての韓国訪問を終え、改めて「百聞は一見に如かず」と再認識した旅でした。



神に感謝



<行事報告>

教会学校 保護者の集い「勇気づけ育児を始めよう」

6 月 15 日（土）教会学校の保護者の集いで、「勇気づけ育児を始めよう」という勉強会を実施しました。教会学校、事務所の皆さまには、実施のためにご理解、ご協力ありがとうございました。

一人っ子の息子への過保護、過干渉に陥るのをなんとかしたいと始めたアドラー心理学にもとづく育児の勉強の仲間に来てもらいました。カトリック教会が初めてという仲間がとても良い印象を持ってくださって、とてもうれしかったと共に、思った以上に福音的なお話しでした。子どもを勇気づけて育てるということは、神様の御心にかなうことだと実感することができました。仲間と参加者の方の感想を紹介します。

またこのような保護者の集いを企画したいと思っています。教会学校以外の子育て中の方々に

も参加していただけるとうれしいです。

(本郷)

このたび初めて教会施設でのアドラー心理学育児の講演会という、貴重な体験をさせていただきました。アドラー心理学とはオーストリアの精神科医アルフレッド・アドラー(1870ー)が創始し、後継者が発展させた心理学の考え方です。1914年に始まった第一次世界大戦に44歳で軍医として従軍し、戦争の悲惨さを体験したアドラー氏は、戦争孤児たちがあふれる街を見て、この社会を争いのない、人々が話し合い助け合う、より良いものに変えたいと強く思いました。そして社会を作っている人々、特にこれから大人になっていこうとする「子どもたち」への「育児」や「教育」をたいへん重視して研究しました。

私たちは毎日の暮らしの中で何気なく子どものお世話をしていますが、それは次の社会をより良いものに変えていけるかもしれない、と思うと一人でも多くの方にアドラー心理学育児をお伝えしたくなるのです。前半は3人で『子どもの話を聴く』という講演を聴いていただき、後半は参加してくださった方々に「子どもの個性を見なおしていただく」というワークを体験していただきました。

大きくてきれいなだけではなく、信仰を中心にしながらゆるやかに地域の人々を受け入れる教会の器の大きさも実感することができる機会ともなり、素敵な時間をいただいたと思っております。
(アドラー心理学認定カウンセラー 澤田裕子)

先日は、教会学校のみなさまのご理解と本郷あいさんのご尽力おかげで、教会学校に集われる保護者の方々と勇気づけの育児についてお話をする機会をもつことができ、感謝の思いで一杯です。どうもありがとうございました。

夏のキャンプの説明会にも参加させて頂いて、若きキャンプリーダーさんたちの子どものよりよい成長を願う熱い思いにも心を打たれました。とても素敵でした！

ご紹介させて頂いたアドラー心理学のおすすめする勇気づけの育児も、自分のことばかりではなくみんなのために、私にできることはなんだろうと考えて、行動できる子どもを育てていこうとしていると学びました。私も育児に困って悩んでいたときにアドラー心理学を学ぶ仲間と出会い、お話を聴いてもらったり、育児の技術について教えてもらって、大変救われました。ご縁を頂いたみなさまとともに、子どものよりよい成長についてこれからも一緒に考え、学んでいければ幸いです。これからもよろしくお願いいたします。
(三木)

(参加者の方々の感想)

- 今後はゆっくり子どもたちと向き合ってやりたいです。過去のことはおいておいて、本人が「今、こう進みたいと思っている」と考えればよい、というお話に安心しました。(母親の育て方のせいだと思っていたので)
- 遅れてきましたが、とても良いお話がきけて本当によかったです。ありがとうございました。
- 育児に悩むことばかりなので、お話がきけてよかったです。毎日怒りまくっているのも、怒らない育児がしたいです。
- 子どもの個性を重んじ、気になるところを気持ちを変えて、子育てを楽しくなるようなお話を聞けて、明日から頑張ってみようと思います。今日はありがとうございました。



教会報 500 号発行に寄せて

現在の広報部員は6名、教会報作成班とホームページ作成班の2班に分かれて活動しています。毎月、信徒のみなさまに寄稿をお願いし、締切日までに原稿を集め、編集し、印刷するまで広報

部員はちょっとした緊張とプレッシャーの時を過ごし、完成した教会報を聖堂入口に並べて、ようやくほっと一息つきます。

今回、500号記念特集ページを編集するにあたり、創刊時から初期の頃の古い教会報を初めて目にしました。当時はタイプライターで原稿を作成し、ガリ版印刷、製本も手折りだったとのこと、時間も労力も今の何倍もかかったことでしょう。そのためでしょうか、手に取ると今でも人の温かみを感じました。

パソコン、インターネット、印刷機、紙折り機といった便利で高性能なツールを駆使して作成している現在の教会報ですが、ただ一つ記事だけは人が書かなければ何も始まりません。いつも原稿作成にご協力頂いているみなさまに、この場をかりて心からお礼申し上げます。

これからも、人のぬくもりを感じる、心のかよった教会報作りを目指していきたいと思います。

(広報部コーディネーター 木藤)



広報部員 教会報作成班：蛭田、山本、藤井、木藤

HP作成班：久保、福田、山本

←教会報印刷風景

500号既刊記念おめでとうございます！

今月の教会報が500号既刊記念と聞き、「さすが六甲教会だな！」と敬服しています。500の数字から単純に換算すると41年と8ヶ月、毎月発行していたとして1969年3月号からということになります。

1948年12月六甲教会が創設、その後、教会の建物が現在の場所に移されたのが、1954年5月（旧聖堂献堂）、そして、現在の聖堂献堂式が1995年11月でした。振り返れば1965年旧聖堂時代、第二バチカン公会議が終了しました。終了後、全世界のカトリック教会は、社会に開かれた教会へと変わっていきます。また第二バチカン公会議は、様々な分野での改革が行われました。特に、新たに発布された「信徒使徒職に関する教令」は、明日の教会を担うべく、信徒のために開かれた教令です。それらは「信徒もまたキリストの司祭職、預言職、王職にあずかる者であり、教会と世間において、神の民全体の使命における自分の役割を果たすものである。（教令2）」と教会の使命への参加を信徒にも呼びかけ、福音宣教を担う者としての具体的指針を教えています。

その第二バチカン公会議終了後の頃から、全国の教会で信徒の積極的な活動への呼びかけとして、また戴いた信仰の目に見えるしるしとして、教会報が創刊されました。したがって六甲教会の500号既刊記念は、教会の歴史を振り返ると同時に、これまで戴いた沢山のめぐみを再認識する上で貴重な記念号になるでしょう。

創刊後500号に至る歩みの中で、諸先輩方を含め大勢の信徒の方々の協力と奉仕があって現在のような立派な教会報になりました。勿論、500号までの間、いろんな難関をくぐり抜けてこられたと思います。「記事も集まらないし、みんなの関心も薄くなってきたからミサ後の“お知らせ”だけ or 週報だけで十分ではないか。既刊に当たり、時間も費用も労力もかかるから今月号でとりあえず休刊にしよう」と考えたこともあったでしょう。そんな窮地に追い込まれても、謙遜に忍耐強く発刊し続けてこられた諸先輩の方々、現広報担当の方々のご尽力に、改めて敬意を表すると同時に心から感謝の意を申し上げます。

また、500号まで続けてこられたということは、神の恵みであると思います。なぜなら、継続・継承こそ見えない「信仰」の証であり、信仰の力でもあるからです。この500号の記念を契機に、

700 号、1000 号発行まで見えない「信仰」のしるしを見える形として、いつまでも継承していくことができることを祈願します。

これからも教会報を通してすべての人にキリストの救いが、信仰の輪がより早く、より丁寧に、より正確に伝えられ、かつこの地域の方々への福音の宅急便となることができるよう、心からお祈りします。

(主任司祭 松村信也)

教会報 500 号発行おめでとうございます。

私は六甲教会で主任司祭をつとめた 14 年間、毎月巻頭言を担当していました。その頃を振り返ると、色々なことが思い出されます。喜びも悲しみもありました。中でも心に残ることは、阪神



淡路大震災と新聖堂の建築です。震災の苦しみや悲しみを乗り越えることができたのも、新聖堂献堂の喜びを共に分かち合うことができたのも、信徒の皆さんの献身的な奉獻と寛大なご協力のおかげであったと思います。六甲教会がつねに協力的で才能ある兄弟姉妹に恵まれていることを心から神に感謝します。

今月 500 号を数える教会報もこれらの教会の喜びや悲しみ、教会の歴史と共にありました。この素晴らしい共同体全体にとって、また信徒一人ひとりにとって、教会報はこれからも大きな支えであり続けて欲しいと思います。

(ジョン・オマリー神父)

教会報 500 号発行を迎えて

早いもので教会報も 8 月号で 500 号を迎えることになりました。亡くなった先輩から「当時はガリ版で刷ったものだよ」とよく聞かされたことがあります。こうして今、500 号まで続いているのは、こうした諸先輩のたゆまぬ努力があったからだと思います。

私もこの教会報の編集に携わって 10 年近くなりますが、一番苦勞するのは原稿集めです。原稿依頼すると、「私は文章が下手だから」と断られたことも何度かあります。記事は文章の上手下手でなく、自分の思いを心から書かれたものに読む人は共感するものです。

それに毎月発行は結構努力が要ります。広報部員の中からも毎月発行の見送りの声も出たことがあるし、「本当に読んでもらっているのだろうか」と疑問も出されたことがあります。500 号はあくまで積み重ねの通過点ではありますが、今一度「教会報」の在り方を見直す時期ではないだろうかと思います。

最後に、皆様からの教会報に対するご意見や投稿をよろしくお願い致します。そして、現在、月末の土曜日に毎回 700 部あまりの教会報の印刷、折り込みをしています。時には人手がなくて広報部員一人が編集、印刷、折り込みのすべてをやったこともありました。お時間のある方は是非、この作業のお手伝いもお願い致します。マンネリを打破する意味でも新しい息吹を入れる為にも、広報に興味ある新人を募集致します。そして、これからも何とか毎月発行を続けていきたいと思いますので、よろしくご協力の程お願い致します。

(広報部員 蛭田)

福音宣教に資するウェブサイトとしての六甲教会ホームページ

六甲教会では、インターネット黎明期の 2002 年以前よりウェブサイトを運営しており、当時としては先進的な取り組みであった。2002 年になり、広報部によってサイトのリニューアルが計画された。計画の主な内容は次の通りである。

- ① ドメイン（アドレス）を六甲教会のものにすること
- ② デザインを新しくすること

- ③ 図や教会の概要などの案内を詳しくすること
- ④ 案内だけでなく教会報の記事を掲載すること
- ⑤ 記事のバックナンバーを蓄積すること

これによって、パンフレットのウェブ版といった趣きであったウェブサイトを、宣教活動の一環として位置づけ直すことができた。作ったまま放置されているキリスト教関係のウェブサイトもある中、十年以上に渡ってコンスタントに更新され続けているサイトは珍しく、サイトが発信し続けてきたことによる福音宣教への貢献は大きいものであると考えている。これはひとえに、広報部部員の尽力によるものであり、その努力に感謝するとともに、継続して福音を発信できるサイトであり続けて欲しいと考えている。

(元広報部員 三澤)

もうひとつの共同体として

教会報担当者として、500号という区切りの発行を迎えて、とても嬉しく、誇らしく思っています。広報のお手伝いを始めてすぐに急激な世代交代があり、たった2人で編集をしていた頃は「必ず毎月発行すること」だけが目標でした。多くの方にお手助けを頂き、何とかその責任を果たせたかと思います。関わって下さっている皆様に感謝いたします。

この教会報は、有志の方々によって日頃教会へ来られない方々にも届けられています。また、ホームページも、今は忙しくて教会になかなか来られない方々、遠くにいらっしゃる方々に見てほしいと思い、運営をしています。できれば、この教会報の紙面が六甲教会のもう一つの共同体としての、皆様の交わりの場となることを希望しています。

第二バチカン公会議から50年の今年に、教会報500号という、過去と未来に思いを馳せる機会を設けて下さった神様の配慮に驚いております。最後に、創刊号に寄せられた、田口大阪司教(当時)の文章をご紹介します。召命を受け、主に強められ、今後も広報活動ができますようお願いながら…。

(広報部員 藤井)

創刊号に寄せて

大阪司教 田口 芳五郎

皆様の六甲教会では、この度教会報を創刊されると承りました。これも皆様の活発な使徒的活動の一つのあらわれだと存じます。

初代教会の歴史をひもときますと、アンチオキアとローマでは、使徒達が来る前にすでにキリスト信者の共同体、すなわち教会が存在しはじめていたのであります。このことは非常に深い意味をもっております。第二バチカン公会議の教会憲章は信徒の使徒職が、教会の教霊活動そのもののへの参与であり、すべての人は洗礼と堅信を通して主イエズス御自身からこの使徒職に任ぜられることを明白に教えました。皆様は洗礼によって、主イエズスと結ばれ、堅信によって強められることによって、使徒職への召命をうけ、またすでにその力を与えられているのであります。皆様はキリストの証人として、キリストの司祭的権能に参与し、この世を神に奉獻するのであります。

私は、皆様がこの教会報発刊を機として、神父様方を中心とする使徒職にますます励まれますよう希望し、心からなる祝福をお送り致します。

1968年9月25日



《各部だより》 各専門部会の活動をお知らせいたします

 三日月会

9月16日(月・祝) 総会

 中高生会

8月13日～15日 キャンプ

場所 レーベンス・シュレー(奈良)

教会学校

8月8日～11日 キャンプ

場所 兎和野高原

典礼部

8月25日(日) 朗読奉仕者の勉強会

宣教部

8月25日(日) 部会

《 お 知 ら せ 》 教会のみなさまに知って頂きたい活動やお知らせです

★社会活動部より★

社会活動部の活動・♪手芸の集い、♪炊き出し、♪ふれあい広場はいずれも8月はお休みです。

★教会学校たより★

夏のキャンプ

ふっこうのかけ橋

夏のキャンプは8月8日から11日まで、兵庫県兎和野高原において実施されます。

今年のキャンプには神戸地区評議会のプロジェクト「ふっこうのかけ橋」により、福島県の小学6年生女子2名が参加予定です。

今年のふっこうのかけ橋プロジェクトでは、各小教区の保養プログラムに福島の家族を個別に受け入れますが、六甲教会のキャンプは保養目的のキャンプではないので、家族単位では受け入れず、観光やバーベキュー大会などありません。毎年行っているキャンプに参加していただだけで、特別な歓迎行事も行いません。夏休みが終わり、福島の小教区で、保養プログラムでUSJや海水浴に行った他のお友達とどんな夏の思い出を語るのか考えると、少し気の毒な気もしますが、私たちリーダーは、他の小教区の保養プログラムとは違う何かを、福島に持って帰っていただけると確信しています。

六甲教会の皆様には、「ふっこうのかけ橋」のために募金も含め多くの支援をいただきまして、本当にありがとうございます。特に7月14日、21日の2日間の募金活動にて18万円以上のお心添えがあったと聞いています。いつもながら皆様のご厚情に驚いています。

リーダー研修とキャンプ準備会

今年のキャンプのテーマは「そうぞう」です。想像と創造の2つの意味を込めた言葉です。3泊4日の中で、子供達は「そうぞう」をテーマに各プログラムに挑みます(今年のテーマの解説について詳しくはジーザスキッズをご参照下さい)。

このテーマを深めるために、7月13日から14日にかけて1泊2日で30名程度が集合してリーダー研修会を行いました。リーダーのおよそ3分の1にあたる15名の高校生も参加しました。

また、7月27日には参加する小学生を集めてキャンプ準備会を開催しました。今年のキャンプに参加する小学生のうち3分の1が小学1年生ですので、慎重に準備を進めています。準備会の後は、医師による医療講習会を開きキャンプ中に起こるかも知れない事故に備えました。

今年のキャンプの内容

ここで、今年のプログラムを教会報読者の皆様だけに少しだけ「こそっと」お教えします。どうか、キャンプに参加するお孫さんや子供さんには教えないで下さいね。

まず、子供たちが挑戦するのは、秘密基地作りです。基本的な素材は、布と木の棒です。布は1m幅×400m用意しました(ご厚意でいただいたものです)。作った基地を使って水鉄砲大会をします。また、今年のキャンプの仕上げとしては、子供たちがダンスを創作します。それぞれのプログラムでどんな「そうぞう」力が発揮されるか楽しみです。

キャンプの準備や片付け等で、小教区の皆様には多大なご迷惑をお掛けすることもあるかも知れません。どうぞ、お許し下さい。

どうぞ、子供たちの無事をお祈り下さい。

(大橋 一郎)

★墓地つ子たより★

共同墓地がリニューアルしました。

内容は墓誌（石板）の増設と植栽です。大型の銘板4枚を増設しました。そのために驚が翼を大きく広げたような姿になりました。そして約200名の方の刻銘が出来ます。今までは冷たい感じの石柱でしたが20種類以上のハーブなどでホッとする感じになりました。お天気のいい日には階段でピクニックはいかがでしょう。



最近、後継者が居ない、遠隔地へ転居などのため、共同墓地への納骨が増えています。確かに、やむを得ないとはいえ墓参が出来ず雑草がボーボーのお墓は、お気の毒に見えます。お隣にも越境してしまいご迷惑でしょう。このような懸念のある方は教会までお知らせください。

墓地委員会 SF



みんなの広場

8月15日

ヨハネ 三好榮之助

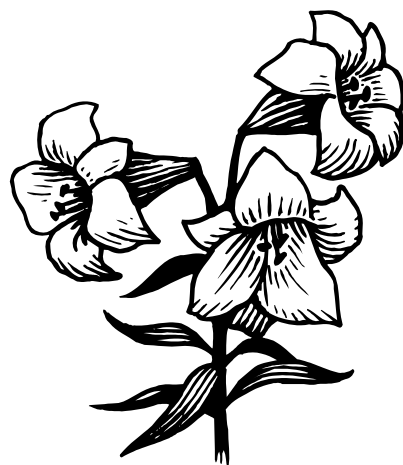
12月8日、聖母の無原罪の御宿りが誤りない教義として宣言されたのは1854年ピオ9世によってでした。聖母への崇敬は古くからあったが揺れ動いていました。アキノの聖トマが聖母の無原罪を認めなかったと言われるのは有名。無原罪の必然といえる聖母の被昇天が教義として宣言されたのは何と1950年になってピオ12世によってでした。

1534年8月15日にロヨラの聖イグナチオが他の6人の同志とミサで誓願を立てました。イエズス会の始まり、その時司祭だったのは7人の中の一人ファールブルだけだったとか、聖フランシスコ・ザビエルもその中の一人でした。聖フランシスコ・ザビエルが鹿児島に上陸したのも1549年8月15日でした。

この無原罪の祭日も被昇天の祭日も平日に祝われるからか信徒の関心は低いようですが、忘れてはならない日です。マリア様の事跡は福音書の中でもごく僅かなエピソードしか伝えられていません。マリア様ご自身にとってもご自身に起こったことは理解できないことだったのでしょう。そのすべてを心に納め、F i a tの一言でお受けになりました。それが完成したのは被昇天によってでした。

“M a t e r D e i、e t m a t e r m e a u” 今は心置きなくわたしたちの“ママ”に甘えましょう。神が“F i a t”と言うべきことと言ってはならないことを識別できる力をくださるように、マリア様をお願いして頂きましょう。22日には「天の元后聖マリア」を記念します。

12月8日はわたしたちの忌まわしい日々が始まり、8月15日はその忌まわしい日々から解放された日でもあります。人間の愚かさと摂理の不思議を想います。



☆ **イエスに出会った女性たち** — 英 隆一朗 著 女子パウロ会

独身の神父さんが女性の視点を書く？ 女性との多様な出会いとかかわり材料にイエスの姿を黙想し、自分の信仰を深めていくための好著である。当時も社会から差別されていた女性たち、そしてその女性たちの勇気ある信仰と行動に接し、豊かな解放への導きを繊細に示される。一人ひとりを大切にしていく神の強い慈しみを体現したイエスの姿がそこに現れてくる。

3・4年前に「あけぼの」に連載したものに加筆したもので、一つひとつの出会いを味わい、分かち合いをしていくことで、より実りは大きいと英神父は言っています。勿論、男性にもイエスに近づく一歩へのいざなってくれます。

☆ **人生を活性化する 25 錠** — 竹下 節子 著 ドン・ボスコ新書

三次元の思考(ものの見方の広さ・深さ・高さ)に大らかな自由な発想を加えた四次元の思考回路を持つと金子賢之介神父から評される著者が「カトリック生活」に連載されたエッセーを単行本化したもの。その自由で心に響く提案と視点は、キリスト者として世の中で生きていくうえでの確かな示唆を与えてくれる。パリに住んだり、音楽活動や多数の著書を著しながらのサブリは読者をどう活性化していくのだろうか。

☆ **聖書入門** — オリエンズ宗教研究所

福音書をはじめて手にする方に向けての入門書。イエスは現代に生きる私たちに何を語りかけているのかを、日本の文化や習慣などの身近なたとえを示しながら解説する。

☆ **教皇ベネディクト十六世 新約の祈り** — ペテロ文庫(カトリック中央協議会)

☆ **YOUCAT カトリック教会の青年向けカテキズム(日本語)** — カトリック中央協議会

☆ **キリスト教** — 竹下 節子 著 講談社

☆ **キリスト教についての 21 章** — 岩島忠彦 著 女子パウロ会

☆ **マザーテレサ 100 の言葉** — ヴォルガンダバーダ編 女子パウロ会

☆ **日本キリスト教史** — 五野井隆史 著 吉川弘文館

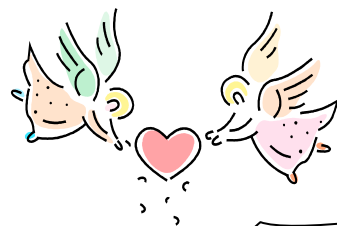
☆ **イエスと二人のマリア (DVD)** — いのちのことば社

母マリアとマグダラのマリアの人生を、フィクションを交えてドラマティックに、そしてイエス・キリストの生涯を聖書に忠実に描いた 204 分の感動作。すべてのことは愛ゆえに起こる。

聖母の被昇天ミサ

8月15日(木) 10時

皆様のご参加を、よろしくお願いいたします。



教会報 9 月号の発行は、9 月 1 日 (日) です。

編集会議 8 月 25 日 (日) です。

記事原稿は 8 月 18 日 (日) 正午までに信徒会館
受付へご提出願います。 (広報部)

<http://www.rokko-catholic.jp>

カ	ト	リ	ッ	ク	六	甲	教	会
〒657-0061	神	戸	市	灘	区	赤	松	町 3-1-21
電	話	0	7	8	-	8	5	1-2846
F	A	X	0	7	8	-	8	5
発行責任者	松	村	信	也				
編集	広	報	部					